歴史よもやま話　その27.

　**悲恋の貴公子・有栖川宮熾仁親王**

　東京南麻布に有栖川宮記念公園があり、有栖川宮熾仁親王の騎馬銅像が立てられている。地下鉄日比谷線の広尾駅近くにあるこの公園の象徴として都民に親しまれている。

　1834年　有栖川宮幟仁親王の第一子として生まれ、17才のとき、孝明天皇の妹・和宮内親王と婚約する。

当時朝廷は徳川幕府から欧米列強との条約締結に勅許を求められていたが、これに反対する公家勢力があり、熾仁親王も批准反対派で、単独で条約批准不可の建白書を朝廷に提出していた。親王は公家社会のなかでは長州攘夷派の有力な急先鋒と見なされていた。対して朝廷には、長州攘夷派を嫌悪する孝明天皇を含め、「一会桑派」（一橋・会津・桑名）があり、熾仁親王はこの派から警戒されていた。

こんななか、熾仁親王は長州藩が作成した松平容保追討決起文を持参して孝明天皇に容保の洛外追放を迫った。しかしこれを事前に察知した孝明天皇は、二条関白や一橋慶喜に参内を命じ、容保追討を拒否する論陣を図った。そうこうしてしているうちに、

長州藩兵と御所守備諸藩兵との間に戦闘が始まってしまった。いわゆる「禁門の変」（1864年）である。孝明天皇は長州藩兵討伐の勅命を下し、熾仁親王らのクーデターは失敗した。

　熾仁親王は父・幟仁親王とともに謹慎蟄居を命じられ、明治天皇が践祚する1867年まで禁を解かれることはなかった。

　この間、長州征討、薩長同盟の成立、徳川家茂の死、一橋慶喜の将軍襲職、孝明天皇崩御など、情勢は大きく変化した。

　実は、これらの事件に先立つ1860年、和宮との婚約延期願いが武家伝奏を通じて出され勅許されている。同年　弱体化した徳川幕府は公武合体を策し、その一環として

和宮の14代将軍家茂への降嫁が願い出された。そして翌1861年孝明天皇の勅許がなされ、和宮は江戸に下っている。

　戊申戦争で熾仁親王は、東征大都督として官軍を率いて東上し江戸城攻撃へと進む。

その後、官軍参謀・西郷隆盛と幕府軍事総裁・勝海舟の会談があり、江戸無血開城となったことは周知のことである。なお、家茂死後も江戸城に留まっていた和宮（静寛院宮）は、徹底抗戦を叫ぶ幕臣たちを説得し、この無血開城に導く一助になったとの説がある。

　明治維新後親王は、兵部卿、元老院議長など要職を歴任し、最後は日清戦争・陸軍参謀総長として広島に下るも、病いを発しそのなか薨去する。享年61才、波瀾万丈な一生であった。

世の中が平穏であれば、和宮と熾仁親王の婚約そして結婚、仲睦まじい生活が待っていたであろうに、これが許されなかった。